

エジプト中王国時代における エレファティネ島のヘカイブ聖域

——聖域創設期のサレンプト 1 世の碑文をもとに——

秋 田 宣 孝

はじめに

古代エジプト史において、エレファンティネ島は地理的にも宗教的にも重要な位置を占めていた。現在のアスワン地域のナイル川に浮かぶこの島は、エジプトが統一後のファラオ時代に入ると、エジプト人たちに自身の国境の南端と位置づけられた。エレファンティネ島は、島のすぐ南にある第 1 急湍とともに、その南に広がるヌビア地域とエジプトとを隔てる自然の要害の役割を果たしたのである。この島は古くからエジプト人の居住が知られ、アスワン地域に暮らすエジプト人の生活の場でもあったが、ファラオ時代を通じて同時にアスワン地域や第 1 急湍の神とされるクヌム神、および他の多くの神々の聖域が設けられていたことでも知られている。エレファンティネ島はアスワン地域における宗教上の中心地としての役割を担っていたといえる。

本稿が注目するのは中王国時代、第 12 王朝（紀元前 1976–1794/93 年）⁽¹⁾の王センウスレト 1 世（紀元前 1956–1911/10 年）の治世にエレファンティネ島に創設されたヘカイブの聖域である。島の南東部に位置するヘカイブ聖域は、発掘によると、約 15 メートル四方で泥レンガ製の壁で囲まれていることが現在明らかになっている。

ここで取り上げるヘカイブとは個人名であると見られるが、古代エジプトにおいて、神（々）や諸王以外の私人が崇拝の対象となることはかなり異例なこ

とだといえる。だとすれば、王として古代エジプト王朝時代に確認できないヘカイブとはいかなる人物なのか、アスワン地域とどのように関わりをもった人物なのか。

問題のヘカイブに関して人物特定を試みたのが、ハバシュ (Habachi, L) である。このヘカイブとは、古王国時代の第 6 王朝 (紀元前 2322-2191 年) 後期にアスワンを拠点に対ヌビア政策において活躍した人物、ペピナクト・ヘカイブであると彼は見ている。

筆者は、第 6 王朝後半期におけるエジプトの対ヌビア政策について、これまで研究をすすめ⁽²⁾、とりわけ「ヌビア人たちの監督官」(*imy-r i'3ww* : イミイ・エル・イアアウウ)⁽³⁾という称号を持つ者たちをについて分析してきたが、まさにハバシュがあげるペピナクト・ヘカイブとは、第 6 王朝後半期にアスワン地域に拠点を置き、「ヌビア人たちの監督官」称号を所持した一人であった。

果たして、ペピナクト・ヘカイブが対ヌビア政策に従事した古王国時代第 6 王朝後半期から約三百年経た中王国時代第 12 王朝の時代になって、彼に対する聖域が創設されることになった事情はいかなるものであったのか。本稿では、「ヌビア人たちの監督官」という称号所持者たちが果たした役割からヘカイブ聖域の創設の意味について考える。

以下では、まずヘカイブ聖域の創設の背景を碑文史料から明らかにし、続いてヘカイブの人物特定についてハバシュの研究の確認を行い、その上で崇拝を受けたヘカイブと「ヌビア人たちの監督官」称号やその所持者たちとの関わりについて見ていくことにする。

1. ヘカイブ聖域の創設

すでに述べたように、ヘカイブ聖域が創設されたのは第 12 王朝の王センウスト 1 世の治世であった。聖域から出土した二つの碑文からは、聖域創設に関わったのはアスワン地域の有力役人、サレンプト 1 世であったことが明



図1 エジプト全図
 (日本オリエント学会編、『古代オリエント事典』, 2004年, 854頁(エジプト全体図)を改変)

らかである。

サレンプト 1 世がヘカイブ聖域に奉納した聖所の碑文（碑文 A）には次のようにある。

「…私（サレンプト 1 世）はいかなる有能なものたちの聖所よりも大きな聖所を彼（ヘカイブ）のために建設し，それを（泥レンガ製の）壁で取り囲んだ。…」⁽⁴⁾

一方，同じくサレンプト 1 世の葬祭ステラの碑文（碑文 B）には以下のよう記されている。

「私（サレンプト 1 世）は，亡きヘカイブのためにこの聖所を設け，それは私が上下エジプト王ケペルカラー（センウスレト 1 世）に好まれているからであり，州長官たちやこの地のあらゆる貴族たちよりも彼により特別の存在とされているからであった。」⁽⁵⁾

二つの碑文の引用部分は，ヘカイブ聖域の創設を行ったのがサレンプト 1 世であることを明示している。

同じ聖所の碑文（碑文 A）や別の葬祭ステラ（碑文 C）からは，サレンプト 1 世がヘカイブのために供給していた供物に関して知ることができる。すなわち，サレンプト 1 世は，碑文 A（「私（サレンプト 1 世）は，彼（ヘカイブ）のために，多くの日々のパンやビールの供物や私が行った（ヘカイブのための日々の供物）よりも多くの祝祭の供物をもたらしたのだった。」）⁽⁶⁾，および碑文 C（「下エジプト王の印璽保持者であり，朗唱神官である亡きヘカイブにワグ（*w3g*）祭やミシート（*msyt*）祭やソカル神祭やトト神祭やあらゆる美しい日における供物，パンやビール，雄牛や鳥がもたらされるだろう。」）⁽⁷⁾，これらにおいて，実際にサレンプト 1 世がヘカイブに対して行ったと思われる供物供給について述べている。

聖域の創設者であるサレンプト 1 世は、自身のための聖所の碑文（碑文 A）において自身を「彼（ヘカイブ）が愛した息子」⁽⁸⁾と記している。けれども、実際にサレンプト 1 世とヘカイブとの間に血縁関係があったかどうかは他の史料からは確認することはできない一方、サレンプト 1 世は別の碑文において、自身を「彼（ヘカイブ）の後継者」⁽⁹⁾と表現しており、「彼（ヘカイブ）が愛した息子」というのは比喩的な表現の可能性を含んでいる。

ヘカイブに対する葬祭、および供物供給に関しては、サレンプト 1 世だけでなく他の祝祭や神々の供物からも、ヘカイブ聖域へと供物が給されたことが碑文 A、碑文 C から読み取ることができる。

「私（サレンプト 1 世）は、彼（ヘカイブ）のために、多くの日々のパンやビールの供物や私が行った（ヘカイブのための日々の供物）よりも多くの祝祭の供物がもたらしたのだった。」（碑文 A）⁽¹⁰⁾

「下エジプト王の印璽保持者であり、朗唱神官である亡きヘカイブにワグ(w3g) 祭やミシート(msyt) 祭やソカル神祭やトト神祭やあらゆる美しい日における供物、パンやビール、雄牛や鳥がもたらされるだろう。」（碑文 C）⁽¹¹⁾

さらに、サレンプト 1 世の葬祭ステラ（碑文 B）からは、王センウスレト 1 世によりサレンプト 1 世自身の葬祭準備に必要な棺、黄金の首飾り、衣装、軟膏、二艘の船を授与されたことが判明する。それは以下のようなものである。

「陛下（センウスレト 1 世）は、私（サレンプト 1 世）に装飾をともなつた棺や黄金の首飾りや軟膏を責任ある（王の）家令により二つの選りすぐった船とともにお与えになったのだ。」（碑文 B）⁽¹²⁾

この碑文 B の引用部分からは、サレンプト 1 世によるヘカイブ聖域の創設

に際して、王センウスレト 1 世の何らかの関与を推察することが可能であろう。

サレンプト 1 世により創設された聖域は、聖域創設以降、第 12 王朝から第 13 王朝（紀元前 1794/93–1648/45 年）にかけて拡張されていった。第 2 中間期の第 13 王朝において、ヘカイブの聖域がほぼ形成されるに至ったことも発掘により明らかになっている。実際に聖域の整備・管理を担ったのは、第 12 王朝のサレンプト 1 世以降のアスワン地域に拠点を置く有力役人たちで、彼らはヘカイブの聖域内に彼ら自身のための聖所を設け、そこに自身の彫像、供物台、供養碑などの記念物を奉納した⁽¹³⁾。

その一方で、ヘカイブ聖域からは歴代の王たちの彫像やその断片が出土している。すなわち、中王国時代では第 12 王朝のセンウスレト 3 世、アメンエムハト 3 世、第 2 中間期においては第 13 王朝のアメンエムハト 5 世・セケムカラー、王ネフェルヘテプ 1 世・カーセケムラーなどの王自身の彫像やその断片である。このことから、創設期のみならずヘカイブ聖域の拡張期においても、アスワン地域の有力役人たちのみならず、エジプト王たちのこの聖域に対する何らかの働きかけ、あるいは意向があったことを想定できるのである。

こうしたヘカイブ聖域から出土物から、このアスワン地域の有力役人たちを通じたヘカイブ聖域拡張⁽¹⁴⁾、および形成に関して、エジプト王たちからの何らかの力の行使があったと考えられる。

2. ヘカイブの人物同定

中王国時代の第 12 王朝にサレンプト 1 世によってエレファンティネ島にヘカイブ聖域が創設され、続く第 2 中間期の第 13 王朝にかけて聖域が拡張されたことは上で述べたとおりである。その聖域で崇拝の対象となったヘカイブとはいかなる人物であったのだろうか。

サレンプト 1 世の碑文ではヘカイブを個人（私人）として言及しているが⁽¹⁵⁾、古代エジプトにおいて、個人（私人）が崇拝の対象になることは極め

て困難であった。というのも、理論上、崇拝の対象になりえるのは神（々）であり、人間であればエジプト諸王に限定されていたからである。個人（私人）はあくまで王に奉仕することで神（々）からの恩恵を王を介して享受することが可能になるので、崇拝する対象は、神（々）であり、自身が奉仕する王である。

ただし、古代エジプトにおけるこうした原則の中にも、若干の例外が存在し、崇拝の対象となった私人もわずかに確認されている。例えば、古王国時代第3王朝の王ジョゼル（紀元前2665-2645年）の宰相イムヘテプであり、新王国時代第18王朝アメンヘテプ3世（紀元前1388-1351/50年）治下のハブの子アメンヘテプや、第19王朝のラムセス2世（紀元前1279-1213年）の王子カエムワセトなどの名が挙げられる。彼らはいずれも国家的事業、とくに国家的建築活動を指揮し、その任務を見事成し遂げた成功者たちである。彼らの生きた後の時代に、偉人、賢者として讃えられ、護符の形として、あるいはパピルス文書に登場し民間信仰的に崇拝の対象となったのである⁽¹⁶⁾。

しかし、ここで取り上げるヘカイブに関しては上記の事例者たちとはいささか事情が異なる。まず、ヘカイブに対する崇拝は、エジプト全土に広がるものではなく、聖域のあるエレファンティネ島やアスワン地域に狭く限定される。さらにヘカイブ崇拝に関して必ずしも民間信仰によるものでなく、むしろヘカイブの聖域の形成においてエジプト王たちからの関与が想定されるからである。

以上のことを踏まえてハバシュによる人物同定⁽¹⁷⁾について検討していくことにする。ハバシュは、ヘカイブ聖域の崇拝対象の候補として、アスワン地域に拠点をおいた古王国時代から中王国時代までの3名のヘカイブという名を持つ人物を挙げている。すなわち中王国時代後半のサハホルの息子ヘカイブ、第1中間期（紀元前2191?-2025/20年）のヘカイブ、第6王朝後半のペピ2世（紀元前2254-2194年）治世下に対ヌビア政策に従事したペピナクト・ヘカイブである。

この内、中王国時代後半のサハホルの息子ヘカイブについては、この人物自

身が、ここで取り上げているヘカイブ聖域に、その聖域拡張段階において自身の彫像を奉納していることから、ヘカイブ崇拝の崇拝対象者としての候補から外している。また第1中間期のヘカイブは、実際に活躍した時代が、このヘカイブの聖域創設より以前であったことから、ヘカイブの聖域の崇拝の対象者であるヘカイブと同定する可能性が残るが、この第1中間期のヘカイブは、彼のアスワンの墓からは彼に対して崇拝を集めるに値するような称号が確認できず、積極的に候補者から除外できないものの、ヘカイブに対する例外的と言えるような個人崇拝の存在を裏付ける上での説得力に欠ける。

3人目のペピナクト・ヘカイブについては、彼が活躍した時期が古王国時代第6王朝後半期のペピ2世治下であるだけに、時期的には聖域創設からかなり隔たりが見られる。しかしヘカイブ聖域において崇拝の対象となっているヘカイブが「ヌビア人たちの監督官」称号を保持しているのに対して⁽¹⁸⁾、このペピナクト・ヘカイブも「ヌビア人たちの監督官」称号を有していた可能性が確實視されている。ペピナクト・ヘカイブ自身の墓から得られる碑文からは、「ヌビア人たちの監督官」称号が確認できないものの、ハバシュがペピナクト・ヘカイブの息子サブニの墓から発見した碑文⁽¹⁹⁾において、父のペピナクト・ヘカイブが「ヌビア人たちの監督官」称号を所持していたことが確認できるからである。

以上から、ハバシュはヘカイブ聖域における崇拝対象者としてのヘカイブをこの第6王朝後半期のペピナクト・ヘカイブと同一視している。このハバシュの推定は妥当なものと思われるが、死後からかなりの時間を隔てて、例外的な崇拝を集めるに至ったペピナクト・ヘカイブとはいかなる人物であったのだろうか。また、なぜ「ヌビア人たちの監督官」称号の所持者であるペピナクト・ヘカイブが後の時代に個人崇拝の対象者として結び付けられたのか、以下で考察することにする。

3. 崇拝の対象としてのヘカイブ

ここでは、古王国時代第6王朝後半期のペピ2世治下において活躍したペピナクト・ヘカイブが、中王国時代第12王朝の王センウスレト1世治下でどのような経緯で崇拝の対象となり、次の第13王朝にかけてエレファンティネ島において聖域を形成するに至ったのかについて考察する。

ペピナクト・ヘカイブは自身の墓に残した伝記碑文において、彼が実施した二度のヌビア遠征について記している。一度目のヌビア遠征では、おそらくヌビア地域の部族間で争いがあったらしく、彼は交易路の確保とこの争いを収拾するためにヌビアの地で軍事活動を行った⁽²⁰⁾。二度目のヌビア遠征の記事からは、一度目のヌビア遠征時における軍事的成功と、交易路の確保により、ヌビアの部族はエジプト王への従順の証として、首長たちの息子たちを差し出し、ペピナクト・ヘカイブ自身が彼らをエジプト王宮に引き連れていることが分かる。その際に、ヌビアの珍しい産物もエジプトへ持ち帰ったことにも、ペピナクト・ヘカイブの伝記碑文は言及している⁽²¹⁾。第6王朝後半期の対ヌビア政策において、交易路の確保の名目のもと、軍事遠征を行ったのが、ペピナクト・ヘカイブのヌビア遠征の特徴である。

ペピナクト・ヘカイブと同様、アスワン地域に拠点を置き、「ヌビア人たちの監督官」称号の所持者として対ヌビア政策に従事した人物にハルクフがいる。けれどもハルクフの活動はペピナクト・ヘカイブとは対照的であった。彼の墓に残る伝記碑文からは、四度のヌビア遠征が実施されたことが明らかであり、三度はペピ2世の前王であるメルエンラー1世（紀元前2260–2254年）の治世⁽²²⁾、四度目のヌビア遠征は王ペピ2世が幼少の時に行われている⁽²³⁾。ハルクフの行った四度のヌビア遠征は、ハルクフの伝記碑文を見る限り、交易を目的として軍事行動を極力避けて行われたことが読み取れる⁽²⁴⁾。

古王国時代末、エジプト南端のアスワンに拠点を置き、対ヌビア政策に従事したペピナクト・ヘカイブとハルクフの2人のうち、後の世の第12王朝の王

センウスレト 1 世がハルクフでなく、ペピナクト・ヘカイブを崇拜の対象として選択し、彼のための聖域を創設したのは、どうしてなのだろうか。

この点については、王センウスレト 1 世自身の対ヌビア政策が大きなヒントになるだろう。王センウスレト 1 世は、その治世にヌビアに軍事遠征を実施し、下ヌビアのブヘンまで征服して、そのブヘンに砦の建設を行っている⁽²⁵⁾。王センウスレト 1 世のヌビア遠征からは、王自身の対ヌビア政策の意志表示として、第 6 王朝後半期ではヌビア遠征で平和的な交易に終始したハルクフよりも、交易路の確保のためといえヌビア地域に軍事遠征を行ったペピナクト・ヘカイブを崇拜の対象者とする方が適切であったのではないか。王センウスレト 1 世自身のヌビア政策の意思表示と重ね合わせた場合、ペピナクト・ヘカイブをヌビア地域とエジプトとの国境にあたるエレファンティネ島に崇拜の対象に選択したとの推測が可能となるのである。

状況は異なるが、こうした王自身の対ヌビア政策の意志表示としては、古王国時代第 6 王朝後半の王メルエンラー 1 世のアスワンの岩壁碑文⁽²⁶⁾にみられる、王のアスワン行幸が挙げられる。この碑文では、アスワンに訪れた王メルエンラー 1 世に対して、ヌビアの首長たちが彼をエジプトとヌビアの国境で出迎えたと伝えている。このメルエンラー 1 世の治世に、ヌビアとの国境地帯となるアスワンに「エジプト人たちの監督官」称号の所持者が初めて配置されたのであり、ハルクフを起用し、従来の対ヌビア政策を転換して、平和的な交易を主とした政策を打ち出したことを考えあわせるならば、王のアスワンへの行幸は王自身の対ヌビア政策に関する意向を反映していた可能性がある。

この点を踏まえると、センウスレト 1 世が自身の対ヌビア政策において、自身の意向の宣言としてエジプト・ヌビア国境のエレファンティネ島の南東部分にヘカイブの聖域を創設したということが現実味を帯びてくる。

エジプト統一後の歴史において、ハルクフやペピナクト・ヘカイブが活躍した第 6 王朝後半期などいくつかの例外はあるにせよ、ヌビアの地がエジプト人にとってその地で軍事遠征を行い、人的資源・ヌビア産物を搾取する場であったことを考慮するならば、ハルクフでなくペピナクト・ヘカイブが崇拜の対象

象として選択されたことの意味を問うことは十分意味のあることだと言える。

さらに、エレファンティネ島というエジプト南端の国境という地理的観点では、第6王朝ペピ2世治世から三百年以上経た第12王朝の王センウスレト1世の治世においても、アスワン地域の有力役人には、日々、ヌビア地域といかにかかわるかということが依然大きな課題であったことが容易に想像できる。アスワン地域の有力役人自身を過去のヌビアへの軍事遠征の成功者であるペピナクト・ヘカイブになぞらえて、彼のヌビア遠征という功績にあやかり、自らをアスワン地域におけるペピナクト・ヘカイブの政治的な後継者として唱えることは大きな意味があったと考えられるだろう。そのことは、ヘカイブとの直接の血縁関係を確認できないにもかかわらず、サレンプト1世が聖域に奉納した碑文の中で、自身をヘカイブの息子とし、アスワン地域におけるヘカイブの後継者だとする記述がそれを物語っているのかもしれない。また、王であるセンウスレト1世が、こうしたアスワン地域の有力役人の意識を王自身の側に地方の有力者を取り込む政治装置として利用した可能性も指摘しておきたい。

おわりに

中王国時代第12王朝の王センウスレト1世治世に、アスワン地域のエレファンティネ島で創設されたヘカイブの聖域は、古代エジプト史上稀有な事例であり、また民間信仰的な個人崇拜ではなかった。そのことは、ヘカイブ聖域の創設に関わったアスワンの有力役人、サレンプト1世が、ヘカイブのためにヘカイブの聖域に奉納した聖所やステラの碑文から明らかである。

また、崇拜の対象としてヘカイブが選択されたのも、王であるセンウスレト1世自身の対ヌビア政策と関係し、ヌビアへの軍事遠征を伴った高圧的な政治宣言の現れであると推測される。この点については、古王国時代後半に対ヌビア政策に従事し、アスワン地域に拠点を置いた「ヌビア人たちの監督官」称号の所持者であるハルクフと、同称号の所持者であったペピナクト・ヘカイブと

を比較することで明らかとなる。すなわち、前者が平和的な交易を行ったのに対して、後者は対照的にヌビアへの軍事遠征の成功者である点から、センウスレト 1 世が、自身の対ヌビア政策に符合するものとして、ペピナクト・ヘカイブをエレファンティネ島において崇拝の対象として選択したとするのが妥当であろう。またヘカイブがヌビアへの軍事遠征の成功者という点で崇拝の対象者として選択されたことから、彼への崇拝と聖域の形成が地理的にもヌビアとのエジプト南端の国境地域にあるエレファンティネ島、それも国境に近い島の南東部の一角という非常に限定された場所で行われたことも容易に想像できる。

聖域創設の際、王センウスレト 1 世は、実際の聖域形成に携わり、聖域管理のために、アスワンの有力役人サレンプト 1 世を起用しているが、そのことは崇拝の対象となるヘカイブと彼とをアスワン地域での州行政において同列に並ぶ者として意識させ、地方の有力者を王権側に取り込むことを意図した政策の表れと考えられる。ただし、この点については、同時代の他の州の有力役人と王との関係を比較する必要があるが、サレンプト 1 世だけの事例だけでは結論づけることができない。

本稿ではペピナクト・ヘカイブ、すなわち古王国時代第 6 王朝後半期の対ヌビア政策に実際に従事した「ヌビア人たちの監督官」称号の所持者が、いかに後の時代にエレファンティネ島における聖域形成の際に、崇拝の対象者として導入されたかを筆者自身のこれまでの研究テーマとの関連から見てきた。そのため、ヘカイブの聖域が形成される中王国時代第 12 王朝の同時代のアスワン地域、とりわけエレファンティネ島の状況をあまり踏まえることができなかった。今後の課題としたい。

註

略号は、Helck, W. und Otto, E. (Hrsg) *Lexicon der Ägyptologie*. Bd. VII., Wiesbaden 1992. による。

- (1) 本稿での王の治世年、および時代については、日本オリエント学会編『古代オリエント事典』、岩波書店、2004年、838-838頁（王名一覧）に従った。
- (2) エジプト第6王朝の対ヌビア政策が「ヌビア人たちの監督官」称号の所持者を通じて、ヌビアの地からいかに平和的に交易により、ヌビアの珍しい産物を持ち帰るかということに焦点を当てた研究に関しては、Kadish, G. E., "Old Kingdom Egyptian activities in Nubia: some reconsiderations", *JEA* 52, 1966, 23-33., 内田杉彦 (1981): 「ヌビアにおける *imy-r i°3ww* - エジプト第6王朝のヌビア政策 -」, 『オリエント』, 第26号, 第1巻, 1-18頁, 拙稿 (2002): 「エジプト第6王朝後半における対ヌビア政策」, 『関学西洋史論集』第24号, 33-43頁を参照。
 また第6王朝のヌビア遠征で「ヌビア人たちの監督官」称号の所持者たちが遠征先において残した岩壁碑文に関する考察については、拙稿 (2002): 「称号 *imy-r i°3ww* 所持者たちの所持称号 - エジプト第6王朝におけるヌビア地域碑文から -」, 『関学西洋史論集』第26号, 59-68頁。を参照されたい。
- (3) Bell, L. D (1976): *Interpreters and Egyptianized Nubians in Ancient Egyptian foreign policy*, A dissertation, Univ. of Pennsylvania (Ann Arbor). 現在, 称号 *imy-r i°3ww* については, ベルが結論を下した「エジプト人化したヌビア人たちの長官」という解釈が妥当なようであるが, ただし, ヌビア以外の遠征地域に派遣された場合は考察される余地があると思われる。
- (4) Habachi, L (1985); pl. 13, No. 2-fig. 3 a 便宜上, サレムプト1世がヘカイブ聖域に奉納した聖所の碑文をここでは碑文Aとする。また本文中に引用する史料訳中の () は, これ以下も筆者の補足である。
- (5) Habachi, L (1985); pl. 24, No. 9-fig. 3
 サレムプト1世がヘカイブ聖域に奉納したこの葬祭ステラの碑文をここでは碑文Bとする。
- (6) Habachi, L (1985); pl. 13, No. 2-fig. 3 a, pl. 15 a, b, No. 2-fig. 3 e
- (7) Habachi, L (1985); pl. 23 a, No.7-fig. 1
 サレムプト1世がヘカイブ聖域に奉納したこの葬祭ステラの碑文をここでは碑文Cとする。
- (8) Habachi, L (1985); pl. 13, No. 2-fig. 3 a, pl. 23 a, No. 7-fig. 1
- (9) Habachi, L (1985); pl. 15 a, b, No. 2-fig. 3 e
- (10) Habachi, L (1985); pl. 13, No. 2-fig. 3 a 特に波下線部分を参照。
- (11) Habachi, L (1985); pl. 23 a, No. 7-fig. 1 特に波下線部分を参照。
- (12) Habachi, L (1985); pl. 24, No. 9-fig. 3
- (13) ヘカイブの聖域, およびヘカイブの聖域から出土史料に関しては, ヘカイブの聖域に関する報告書である Habachi, L. (1985): *Elephantine IV: The Sanctuary*

of Heqaib, Mainz. を参照。

- (14) このサレンプト 1 世以降、ヘカイブの聖域拡張に関わったアスワンの有力者役人たちがアスワンの州内の宗教関連称号を有していることを Franke, D (1994) *Das Heiligtum des Heqaib auf Elephantine : Geschichte eines Provinzheiligtums im Mittleren Reich*, Heidelberg, 1994, は、指摘しているが、特に, Tabelle 1 を参照。
- (15) サレンプト 1 世がヘカイブ聖域に奉納した碑文からはヘカイブの私人として所持している称号が見られる。ヘカイブの称号については、特に Habachi, L (1985) ; pl. 13, No. 2-fig. 3 a, pl. 15 a, b, No. 2-fig. 3 e を参照。
- (16) 個人崇拜の事例としては、特に Wildung, D. (1977) : *Egyptian saints : defecation in Pharaonic Egypt*, New York, 1977. を参照。
- (17) ここで取り扱うエレファンティネ島のヘカイブ聖域のヘカイブと古王国時代第 6 王朝後半期ペピ 2 世治世にアスワンのペピナクト・ヘカイブとの同定に関しては、Habachi, L. (1982) : "Identification of Heqaib and Sabni with owners of Tombs in Qubbet el-Hawa and their relationship with Nubia" *Sixteen Studies of Lower Nubia*, Le Caire, 11-27, および, Habachi, L. (1985) ; 21-23 を参照。
- (18) Habachi, L (1985) ; pl. 13, No. 2-fig. 3 a, pl. 15 a, b, No. 2-fig. 3 e により、ヘカイブについて、「ヌビア人たちの監督官」称号を所持していたことが確認できる。
- (19) Habachi, L. (1982) ; fig. 5.
- (20) Sethe, K (1933) : *Urkunden des Alten Reiches*, Leipzig, 133, ⁹-134, ²
- (21) Sethe, K (1933) ; 134, ³-134, ¹².
- (22) ハルクフの一度目ヌビアに遠征は, Sethe, K (1933) ; 124, ⁹⁻¹⁴., 二度目のヌビア遠征は, Sethe, K (1933) ; 124, ¹⁷-125, ¹¹., 三度目のヌビア遠征は, Sethe, K (1933) ; 125, ¹³-127, ¹¹ を参照。
- (23) Sethe, K (1933) ; 128-131, ⁷.
- (24) Dixon, D, E (1958) : "The Land of Yam", *JEA* 44, 46.

ハルクフの三度目のヌビア遠征の記述からは、遠征目的地であったイアムからの産物を手に入れエジプト帰還の際、イアムの屈強な舞台のエスコートのおかげで 1 つになった下ヌビアのイリチェット、サチュウ、ワワトの首長がイリチェットを通ることを許可し、ハルクフはエジプト帰還を果たしていることから、ハルクフの遠征隊がヌビア部族に対抗できるものではなかったとしている。

内田杉彦 (1981) ; 9-10 頁は、ハルクフがイアムの部隊の協力を得るに際して、ハルクフがイアムの首長を満足させて、何らかの形で支援したのではないかと指摘している。

以上のことから、ハルクフの遠征隊がヌビア部族に対抗しうる軍事力を有しておらず、極力ヌビア地域との衝突を避けたと考えられる。

また、ハルクフはイアムへ向かう際にも、下ヌビアのイリチェット、サチュウ、ワウト経由のナイル川沿いのルートでなく、下ヌビアを迂回し西方オアシス経由のルートでイアムに到達したとしていることから、ハルクフの遠征隊が意識的に下ヌビア地域との武力衝突を避けたものと考えられる。

拙稿 (2002) ; 37-38 頁も参照。

- (25) Grimal, N (1998) : *A History of Ancient Egypt, Oxford* (first published 1992, reprinted ed.), 164., Callender, G (2000) : “The Middle Kingdom Renaissance”, in Saw, I (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, 161.
ブヘンの砦については, Emery, W. B. et al (1979) : *The Fortress of Buhen*, London, p. 4-5, p. 90-91.
- (26) Sethe, K (1933) : 110,⁹⁻¹⁴. ; 「上下エジプト王メルエンラー, (第 1) 急湍の主クヌム神に愛されしもの。治世第 5 年シェムー第 2 月の第 28 日。王自身の行幸。異国のの背後にお立ちになっている。メジャー, イリチェット, ワウトの首長たちは, 敬意を表し, 大きな称賛を与えている。」ここでは, ヌビアのメジャー, イリチェット, ワウトの首長たちがエジプト王メルエンラー 1 世に対して, 国境まで出向いて, 敬意を表している。

——大学院文学研究科研究員——